

19世紀末のイスタンブルにおける日本軍の情報活動：
福島安正『亜欧日記』の史料的价值

The Intelligence Activities of the Japanese Army in Istanbul
at the End of the 19th Century:
the Value of Yasumasa FUKUSHIMA's *Diary in Asia and Europe*
as a Source Material

三沢 伸生
Nobuo MISAWA

はじめに

古今東西を問わず軍部による情報活動（インテリジェンス）は、その機密性ゆえに必ずしも詳細が詳らかにされるものではない。それでも明石元次郎（1864-1919年）が陸軍大佐時代にヨーロッパで行った情報工作が日露戦争の勝利に貢献した逸話や、福島安正（1852-1919年）が陸軍少佐時代の1892年にドイツからの帰路にシベリア単騎横断を決行した情報収集は英雄談として歌にまで歌われ広く国民に知られた。

確かに一面において軍部はこうした海外での情報活動に従事した軍人を国民的英雄として知らしめることで、明治維新もなく欧米列国に伍すなど不可能なほど国力が脆弱でありながら国威を発揚し、軍部の発言権を伸張することを画策していた。しかし他方、情報活動であるがゆえにその細部の報告は、部外秘として軍部および一部政治家・皇室にのみに共有され、活動の詳細については広く公にされて来なかった。

こうした史資料の状況に加えて、国際政治学を専門とする関が指摘するように、現在に至るまで日本の情報史研究は手薄い〔関2016：403〕状況にあり、国内外に埋没する諸史資料の発掘・分析による情報活動の実態解明が喫緊の課題である。

しかしながら本稿は情報活動研究を主眼とするのではなく、日本・トルコ関係史研究の一端として、19世紀に日本軍がイスタンブルにおいて実施していた情報活動の一端の解明を試みるものである。明治維新後において、陸軍も海軍も、近代的軍隊創設のためにお雇い外国人から教育を受ける過



図1 福島安正 中佐時代か
(筆者個人蔵)

程において、教材としてロシアとオスマン帝国との間で繰り返された露土戦争が取り上げられたことから、早い段階からオスマン帝国に対する知識・関心を有していた〔三沢2016〕。

そのために海軍・陸軍ともに早い段階からオスマン帝国の首都たるイスタンブルに要員を派遣している。海軍では、1877-8（明治11-12）年に明治維新後における初の国産軍艦である清輝（艦長：井上良馨）がヨーロッパ諸国遠征途上に、イスタンブルに寄港し、歓迎を受けた。陸軍では、1886-7（明治19-20）年に小松宮彰仁親王が頼子夫人を伴いながら欧米諸国に差遣された際に、イスタンブルを訪問した。表面上は儀礼的な皇室外交の形を取りながら、その実、陸軍中將として近衛都督の要職にあった小松宮彰仁親王（1846-1903年）は積極的に各国陸軍施設を視察し、その詳細を浩瀚な報告書に纏めた〔小松宮1888⁽¹⁾〕。

こうしたなかであって、19世紀末において陸軍の福島安正は対ロシア政策推進上、軍部において先見的にイスラーム世界の重要性を看破し、自分自身が現地に赴いて情報活動を展開した。従前まで、福島の名詞的存在であるシベリア単騎遠征ばかりが世間的な注目を集めるが、それに先立ち1888-9年にはバルカン諸国に派遣、また単騎遠征直後の1895-6年には、エジプト、オスマン帝国、インド、ミャンマー、カージャール朝下のイランに派遣されて情報活動に従事している。以下に福島の海外における情報活動の公刊される書物について示す。

1886年 インド視察

→ * 福島安正・田内三吉1887『印度紀行』陸軍文庫.

1887年 ドイツ駐在

1888-9年 巴爾幹（バルカン）派遣

→ * 福島安正（太田阿山：編）1941『福島將軍遺績』東亜協会に収録

1891年 シベリア横断の申請

1892-3年 シベリア横断の実行

→ * 福島安正（白井喜代松：速記）1892『大陸旅行談』[——].

* 福島安正1893『福島安正遠征日記』金寿堂.

* 西村天囚（編）・福島安正（校）1894『単騎遠征録』金川書店.

※大阪朝日新聞連載付録の単行本化

* 田村維則1894『福島安正君小伝及紀行梗概』田村維則.

* 福島安正（野中春洋：編）1918『柏林より東京へ単騎遠征』小西書店.

* 福島安正・関根休菴・太田阿山1939『大陸征旅詩集』桑文社.

* 福島安正（太田阿山：編）1941『福島將軍遺績』東亜協会.

* 満鐵・弘報課（編）1942『亞細亞横断記』滿洲日日新聞社東京支社出版部.

* 福島安正（太田阿山：編）1943『中央亞細亞より亞拉比亞へ』東亜協会.

1895-6年 エジプト・トルコ・ペルシア等派遣

→ * 福島安正1898「亜細亞旅行談」（1-2）『地学雑誌』10-1, 3

* 福島安正1895『亜欧日記』（1-36）[——].

* 福島安正1900「波斯紀行」『殖民時報』74-79⁽²⁾

一見して分かるように、福島を一躍有名にしたシベリア単騎行にかんして本人および第三者によって公刊された書籍が多い。比べて他の情報活動についてはほとんど書籍など記述史料がなく、福島の情報活動の全容は今に至るまで解明・評価されていない。

1. 『亜欧日記』

本稿で取り扱う『亜欧日記』は手書きのものではなく、活字におこされて印刷された刊本である。しかしながら奥付けは存在せず、おそらくは陸軍の参謀本部によって刊行されたものの、一般に販売されたのではなく、わずかな皇室・軍部・政治家にわずかに配布されたものと判断できる⁽³⁾。

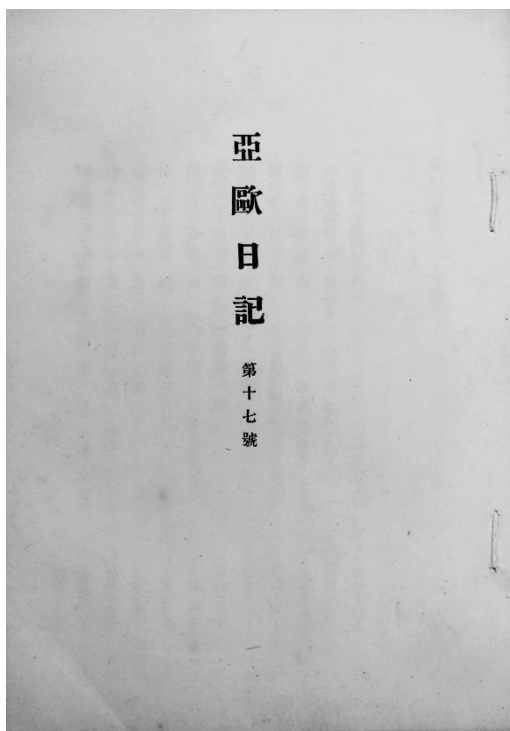


図2 『亜欧日記』第17号書影
(宮内庁宮内公文書館蔵)

現在、第1号から第36号まで全巻揃いで本書を所蔵する国内公的機関は管見の限り、宮城県立図書館と宮内庁書陵部宮内公文書館の2館のみである。しかしながら宮城県立図書館に照会したところ、現在所在不明との回答があり、確実に存在が確認できるのは宮内公文書館の「内大臣府明治天皇御手許書類」、すなわち明治天皇の天覧に献上されたものだけが現存として確認できる。

管見の限り、『亜欧日記』の記述内容に言及した先行研究はなく、その存在自体知られていないので、以下に旅程の整理を兼ねて、各分冊の構成を整理・紹介する。

『亜欧日記』の各分冊の構成 [※ただし以下の欧文表記・日付は筆者の加筆]

第1分冊

- | | | |
|------|--------|-----------------------|
| 第01号 | 1-8丁 | 東京発程上海到着 |
| 第02号 | 9-18丁 | 従上海至香港 |
| 第03号 | 19-26丁 | 従香港至柴昆 (= Saigon) |
| 第04号 | 27-30丁 | 従柴昆至新嘉坡 (= Singapore) |
| 第05号 | 31-36丁 | 従新嘉坡至哥倫坡 (= Colombo) |

- 第06号 37-44丁 従哥倫坡至亞丁 (= Aden)
 第07号 45-57丁 従亞丁至蘇土 (= Port Said/Suez)

第2分冊

- 第08号 59-72丁 従蘇土至改羅 (= Cairo)
 第09号 73-84丁 改羅滞在摘要第一
 第10号 85-107丁 改羅滞在摘要第二

第3分冊

- 第11号 109-107丁 尼爾 (= Nile) 紀行第一
 第12号 137-160丁 尼爾紀行第二

第4分冊

- 第13号 161-176丁 尼爾紀行第三
 第14号 177-202丁 尼爾紀行第四

第5分冊

- 第15号 177-214丁 尼爾紀行第五
 215-218丁 追記 大勢一般 機密 (土耳其、英米問題、伊太利、阿弗利加)
 第16号 219-240丁 亞歷撒德里 (= Alexandria)、君士丹丁堡 (= Constantinople)

第6分冊

- 第17号 219-264丁 君士丹丁堡滞在摘要 1896/01/16-02/05 (21日間)

第7分冊

- 第18号 265-302丁 土耳其軍制第一
 第19号 303-328丁 土耳其軍制第二
 第20号 329-345丁 土耳其時事畧言 (機密)

第8分冊

- 第21号 347-380丁 君士丹丁堡、伊士麥里亞 (= Ismailiya) 間
 第22号 381-402丁 伊士麥里亞、蘭克納 (= Rangoon) 間…

第9分冊

- 第23号 403-428丁 緬甸經過蘭克納巴摩間 03/01-03/12
第24号 429-468丁 緬甸經過蘭克納巴摩間 03/13-03/25
第25号 429-473丁 蘭克納解纜、甲谷他 (= Calcutta) 到着…

第10分冊

- 第26号 475-468丁 西摩拉 (= Shimla) 発程
497-500丁 附記 印度軍混成一旅団埃及派遣 (機密)、
波斯及ヒ中亞旅行計画 (機密)
第27号 501-510丁 沙曼 (= Chaman) (機密) …

第11分冊

- 第28号 511-536丁 一海二湾沿岸記要、孟買 (= Mumbai) 解纜…

第12分冊

- 第29号 537-546丁 喀拉支 (= Karachi) 到着…

第13分冊

- 第30号 547-568丁 不西拉 (= Bushehr) 滞在

第14分冊

- 第31号 569-590丁 波斯紀行第一
第32号 591-600丁 波斯紀行第二

第15分冊

- 第33号 601-614丁 波斯紀行第三
第34号 615-621丁 波斯紀行第四
第35号 623-629丁 波斯紀行第五

第16分冊

- 第36号 631-645丁 波斯紀行第六

2. イスタンブル滞在中の行動

本書の記述に基づき、3週間の滞在中における福島安正が行った情報活動をまとめる。

- 1/16 イスタンブル着。
イギリス大使館訪問、駐日英公使サトウの添書を提出。
→外務大臣を訪問するものの面会は果たせず。
- 1/17 アメリカ公使館訪問、公使と面会。
ロシア大使館訪問、ロシア大使と面会。駐日ロシア公使の添書提出。
外務大臣私邸を訪問、面会を果たす。
→西園寺外相の書簡を交付して、士官学校視察を依頼。
Levant 新聞社表敬訪問。
イタリア大使館訪問、大使と面会。
- 1/18 イギリス大使館付武官を訪問、情報交換。
イタリア大使館付武官と面会、情報交換。
- 1/19 Levant 紙新聞社社長と情報交換。
イタリア大使館付武官と面会、情報交換。
- 1/20 ※記載なし
- 1/21 中村商店の中村健次郎・山田寅次郎の来訪⁽⁴⁾。
- 1/22 ドイツ通訳官・イタリア大使と懇談。
セルビア公使館付武官の来訪。
- 1/23 宮内省式部長官と面会。
- 1/24 ユルドゥズ宮殿におけるスルタンの金曜礼拝式典を拝謁。
- 1/25 ドイツ大使館を訪問するも書記官・2等通訳官との面会果たせず。
Times 紙駐在記者の来訪。
- 1/26 宿舎に終日とどまり調査に従事。
- 1/27 いまだ外務大臣より士官学校視察の可否の音沙汰ないことを嘆く。
Times 紙駐在記者の来訪。
- 1/28 陸軍大臣を訪問、面会。
→士官学校視察の督促。
ドイツ書記官の晩餐会の招待。
- 1/29 カラキョイ地区のハمام（蒸し風呂）体験。
- 1/30 イタリア大使館付武官、セルビア公使館付武官を訪問。
式部長官より来簡。

1/31 ユルドゥズ宮殿におけるスルタンの金曜礼拝式典を拝謁。

2/1 5日にイスタンブル発を決意。

侍中武官長を訪問。

2/2 イギリス大使館訪問、大使と面会できず冷遇に怒る。

ペルシャ（カージャール朝）大使館を訪問、大使と面会。

→ペルシャ行の便宜供与の約束を得る。

2/3 頭痛・睡眠不足のため、終日宿舎。

2/4 数か所を訪問。

ハмам再訪。

ペルシャ大使より本国外務大臣宛添書の供与。

2/5 ようやく士官学校の視察実現。

外務大臣に離別の挨拶。

イスタンブル発。

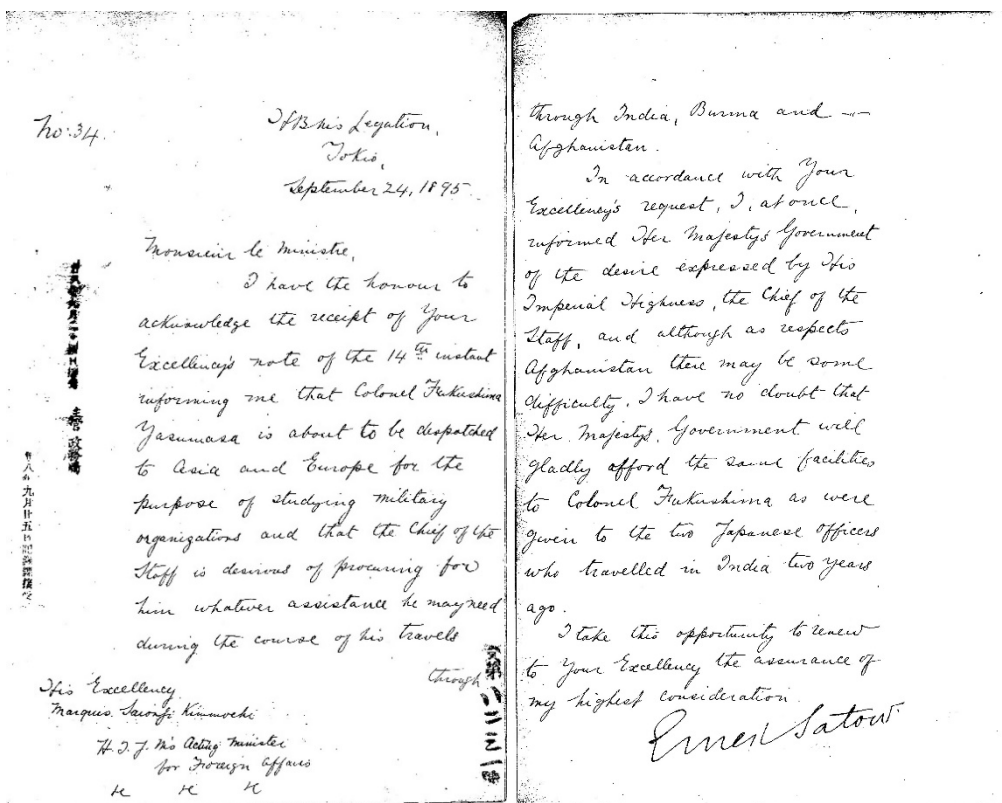


図3 福島の出張にイギリスの便宜供与要請に対する駐日公使サトウの回答
(外務省外交史料館蔵 アジア歴史資料センターより)

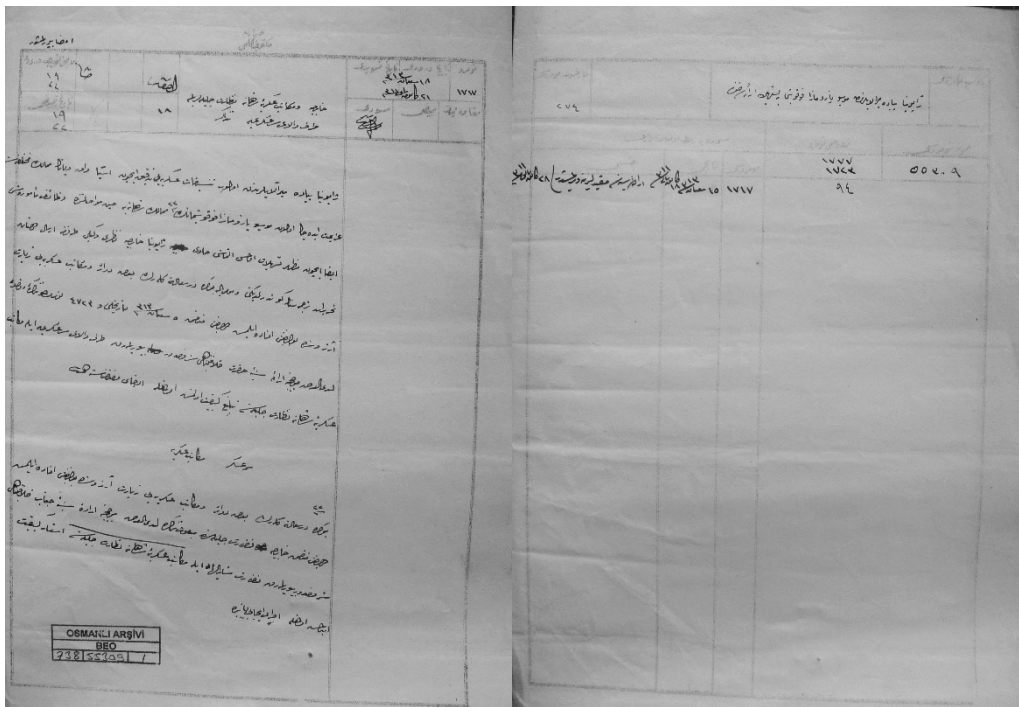


図4 福島士官学校視察要請に便宜供与決済文書
(イスタンブル総理府オスマン文書館蔵 BEO 738-55309)

これら記述から、福島の情報活動は、決して密偵・隠密行動の類ではなく、日本とオスマン帝国との間にまだ外交関係がないため、イギリス・イタリア・ドイツ・セルビアなどオスマン帝国に公館を構える諸外国に依拠しつつ、外務省・宮内省に訪問の表敬を行い、あくまで便宜供与を求める形式をとっていることが分かる（しかし欧米列強の中で、唯一フランス大使館との接触がない）。実際、福島の派遣にあたり、参謀本部はイギリス公使サトウ（Ernest Mason SATOW, 1843-1929）に便宜を依頼すべく奔走している〔外務省外交史料館『帝国陸海軍将校海外派遣雑件／陸軍ノ部』第一巻〕。しかしながら福島が嘆いているようにイギリス大使は風邪を理由に最後まで面会に应ぜず、サトウの添書も効果がなかった。福島自身はシベリア単騎行で名を馳せた自分に好意を示すことはイギリスの利害にかなわないからだろうと分析している。福島の主目的は繰り返し日記中に記載するように、士官学校の視察であった。しかしながらオスマン帝国側の対応も当意即妙なものではなく、何度督促しても士官学校視察の願いがかなえられず、最終日にかろうじて間に合った次第で、福島自身も視察に満足していなかったようである。イスタンブルの総理府オスマン文書館（BOA）には福島が士官学校を見学することに便宜を供したことを示す文書〔BEO 738-55309, İ.HR.350-10〕が残されており、福島を警戒して許可を与えなかったわけではなく、手続き上の遅延が主原因のように理解できる。

いまひとつ興味深いのは、福島の訪問がイスタンブル社会の中で注目を集めていない点である。1891年にエルトゥールル号事件の生存者送還の延長上でイスタンブルに1か月以上滞在した比叡・金

剛の乗組員は大歓迎を受けて、地元新聞にもその動向が記された。5年を経て、日本に対する市民感情が特記するものではなくなっている。この間にオスマン帝国にまで知れ渡った日本に関する事情と
例えば、1894-5年の日清戦争であるが、その影響があるのかを史料に基づき検討することが今後の
課題である。

3. 日記に記される軍事情報

それでも以下のような最終日の記述において福島は士官学校視察などは不本意であったものの、オ
スマン帝国の軍事研究が十分にできたと述べる。

「…上兵営学校等巡覧ノ一事ハ頗ル其意ヲ果スト雖モ土耳其ノ軍制実力及ヒ時事ノ研究ニ於テハ意
外ノ結果ヲ得タリ…」(264丁)

福島が自信をもって語る結果とはイタリア大使とイタリア大使館付武官からもたされた情報であ
り、第18号から20号までにその詳細な記録をまとめて参謀総長小松宮彰仁宛に報告している。その内
容は小松宮自身の視察記録に比べてはるかに詳細で具体的な情報に富んでいる。イタリア側の意図に
ついては何ら判断する史料が見出されないが、福島の、あるいは当時の日本情報将校の情報活動が外
交官・武官との交流の中からもたらされたものと分かる。

第18号から20号までに記される軍事情報は以下のとおりである。

第18号 265-302丁

土耳其軍制第一

*面積人口

*義務兵役

*軍団管区

*軍団編成 (歩兵・騎兵・砲兵・要塞砲兵・工兵・陸軍病院)

*戦時兵数

*部隊部署

*土耳其戦列軍全表

*土耳其配兵表 (第一二三四五六七軍団・黒哇斯 (Hijaz)・克勒德 (Crete)・多里浪利 (Toripoli)

師団

*運輸交通 (鉄道・郵便・電信)

*地方軍管配置表 (第一二三四五六七軍管)

- * 附図（土耳其地方軍分界図）（甲（第一二三軍管）乙（第四軍管）丙（第五軍管）丁（第六軍管））

第19号 303-328丁

土耳其軍制第二

- * 不規騎兵
- * 憲兵
- * 砲兵總監
- * 防御工事 附図二（波斯火爾防禦達丹尼爾防禦）
 - 其一 波斯火爾（Bosphoras）
 - 其二 察達尼爾（Chatarja）
 - 其三 達丹尼爾（Dardanel）
 - 其四 武烈爾線（Brale）
 - 其五 安德里堡（Adrianople）
 - 其六 尼爾塞倫（Erzrum）
- * 銃器
- * 彈藥
- * 將校
- * 俸給
- * 目下計画

第20号 329-345丁

土耳其時事畧言（機密）

- * 連發銃支給
- * 彈藥供給乏
- * 兵数減少多
- * 被服彈藥欠
- * 俸給屢不達
- * 將校無精神
- * 軍隊無腦髓
- * 良制不能用
- * 盲信非真勇
- * 慘憺乱国家
- * 不規兵為害

- * 暴殺実可驚
- * 飢饉將從之
- * 軍艦無石炭
- * 艦長売機関
- * 汚吏私税関
- * 劣官乱郵政
- * 輕約不知耻
- * 細大皆親裁
- * 令下益紛擾
- * 強国分二説
- * 将来果如何

第18号・第19号はオスマン帝国の兵制一般の情報であるが、注目すべきは機密扱いの第20号である。福島自身の経験と恐らくイタリア大使館付武官らからの伝聞情報に基づいてであろうか、オスマン帝国の兵制さらには官僚全般の腐敗状況を糾弾する辛辣な内容となっている。これを見る限りにおいて、福島のオスマン帝国への評価が相当に低いものであることが分かる。小松宮彰仁親王の記録にはこうした状況分析は記されていない。さらにはそのほかイスタンブル訪問を果たした陸軍・海軍の士官たち、すなわち1878年にイスタンブルを訪問した軍艦清輝の艦長である井上良馨（1845-1929年）少佐、1881年に吉田使節団の一員としてイスタンブルを訪問した陸軍の古川宣誉（1849-1921年）大尉、1891年にエルトゥールル号事件の生存者送還を期にイスタンブルを訪問した軍艦比叡・金剛の艦長である、田中綱常少佐（1842-1903年）・日高壯之丞少佐（1848-1932年）らは、スルタンとの謁見を果たしたり、同じく士官学校の視察を行ったりと様々な機会を有しながらも、福島のようなオスマン帝国の兵制にかかわる詳細な情報・分析を残してらず、福島の『亜欧日記』が当時の日本軍の情報活動として特筆すべきものであることが分かる。

おわりに

オスマン帝国を出立した福島は上記の旅程にあるように、再度エジプトに南下、インド・ベルシャを目指す。その内容も興味深いのであるが、紙片の都合もあり、オスマン帝国に先行するエジプト、以降のベルシャについては稿を改めて扱うこととする。

さて全日程を終えて日本に戻った福島は、参謀本部、そこから外務省に働きかけて、イスタンブル滞在中に知遇を得た二人のオスマン軍人に対して勲章贈呈の手続きを進めた〔防衛省防衛研究所『明治29年坤『貳大日記4月』』；国立公文書館『叙勲裁可書・明治二十九年・叙勲卷二・外国人』〕。それ

は単なる儀礼に過ぎないかもしれないが、情報活動の主体が人間関係にあり、儀礼として勲章贈与を行うことは、儀礼以上に軍務として必要不可欠であったのであろう⁽⁵⁾。

福島がイスタンブルにおいて行った情報活動は独自の調査というよりは、西洋式軍人教育を習得する過程で培われた西洋式軍人の同職意識に基づく公館付武官との人間関係、ならびに儀礼的ないし外交的思惑を絡めた外交官との人間関係に基づくものであった。その意味において日本独自のものというよりも、西洋的規範の中で西洋と同じ方式でもって行われた情報活動であった。

それでも19世紀の末の段階において、将来的な軍の世界戦略を担うべく、イスラーム世界の動向を重要視し、バルカン半島の視察のうえで、エジプト、オスマン帝国、カージャール朝にまで関心を抱き、その軍事情勢の把握に努めて一人奔走する福島の行動は、その後の日本軍の地中海世界進出の基盤をなすものであった。

※本稿は、日本学術振興会科研費基盤研究C研究課題番号26370832「昭和前期における在日イスラーム教徒の対日活動」（平成26～29年度、研究代表者：三沢伸生）の研究成果の一部である。

※本研究は、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」の成果です。

註

- (1) 1885-6年の小松宮彰仁親王の欧米歴訪は、一面においては外交制度の成熟過程における政治家・外交官に代わっての皇室外交の一端であった。しかし、当時、皇族がヨーロッパ諸国皇族を範として軍役に付き、小松宮彰仁親王自身、当時は陸軍中將・近衛都督の要職にあり、訪問諸国の軍関係施設を視察、その成果を（小松宮1888）にまとめており、皇族外交と並んで軍の情報活動の役割も担っていた。
- (2) 福島の著作に関する網羅的な書誌は作成されておらず、拙稿の記述には多くの逸脱があるものとする。とりわけ『殖民時報』は日本の公的機関において欠号が多く完全な所蔵がなく、同誌には他に福島の記述がある可能性が残される。
- (3) 『亜欧日記』の存在は、伊藤博文（1841-1909年）に献呈され、伊藤関係文書に収蔵されていた1号から8号までが、後に伊藤関係文書として『秘書類纂』として1933-6年に公刊された際に知られるようになった。しかしその際に36号まで公刊されたことが不明で、肝心のイスラーム世界にかかわる記述が存在するかどうかは長らく不明であった。
- (4) 中村商店の詳細については、三沢2009に詳しい。従前まで中村商店がイスタンブルのペラ大通り（Grand rue de Pera、現在のイステクラール通り（İstiklal Caddesi）のハッププロ・パッサージュ（Hazoppulo Pasajı）に移転したのは、同店の用意したクリスマスセールの宣伝媒体から1895年12月と目する指摘があったが、福島の指摘から実際の移転は1月末であることが分かる。福島は以来、時に応じて山田寅次郎と書簡の往来を行って関係性を担保し、山田を介してトルコ関係の情報収集を行っていた観がある。
- (5) 勲章贈与に関しては、日本・トルコ双方の文書館に授与関係の公的文書、並びに授与された本人からの雇用申請書が残されており、これに私的文書としての勲記のような史料を総合的に分析することにより、日本とオスマン帝国における人間関係、およびにその人間関係に依拠した情報活動の一端を分析できる可能性がある、将来的な課題としたい。

参考文献

（文書史料）

イスタンブル総理府オスマン文書館（Başbakanlık Osmanlı Arşivi）

BEO 738-55309 (19/Şaban/1313=1896/ 2 / 4)

İ.HR.350-10 (1313Ş-10=1896/ 1 /26)

外務省外交史料館

「福島大佐ヲ亜細亞及欧州へ派遣」『帝国陸海軍将校海外派遣雑件／陸軍ノ部』第一卷 (JACAR アジア歴史資料センター Ref.B07090448200)

防衛省防衛研究所

「土耳其国人へ勲章贈与の件」『明治29年坤』『貳大日記 4 月』 (JACAR アジア歴史資料センター Ref.C6082416000)

国立公文書館

「土耳其国プロミエー、トラヂユクトール、ヂユ、ヂヴワン、アンベリアル、ダボン、エッフエンジー外一名叙勲ノ件」『叙勲裁可書・明治二十九年・叙勲卷二・外国人』 (JACAR アジア歴史資料センター Ref.A10112459400)

(文献史料)

小松宮彰仁1888『欧国軍事見聞録』[――]

福島安正1895『亜欧日記』(1-36) [――].

※その他、福島関係の文献史料は本文中に表記。

(研究)

大場一石2003「防衛庁からの戦史(1) 単騎シベリア横断福島安正中佐」『セキュリティアン』541, 52-3.

大場一石2004「防衛庁からの戦史(2) 情報将校福島安正の生涯」『セキュリティアン』543, 56-7.

関誠2008「日清戦争以前の日本陸軍参謀本部の情報活動と軍事的対外認識」『国際政治』154, 12-28.

関誠2016『日清戦争前夜における日本のインテリジェンス：明治前期の軍事情報活動と外交政策』ミネルヴァ書房.

原山煌2006「福島安正の言説：シベリア単騎横断旅行以後の大衆向け活動について」『桃山学院大学総合研究所紀要』31-3, 97-114.

三沢伸生2009「イスタンブールの中村商店をめぐる人間関係の事例研究：徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎の書簡を中心に」『東洋大学社会学部紀要』46-2, 181-220.

三沢伸生2016「明治期の日本社会における露土戦争の認識」『東洋大学社会学部紀要』54-1, 41-54.

【Abstract】

The Intelligence Activities of the Japanese Army in Istanbul
at the End of the 19th Century:
the Value of Yasumasa FUKUSHIMA's *Diary in Asia and Europe*
as a Source Material

Nobuo MISAWA

After the Meiji Restoration (1868), the Japanese Military Authority began to collect world-wide military information with the intelligence activities.

First, they depended on the some members of the Royal family, like Prince Akihito Komatsu-no-miya (1846–1903), who was the lieutenant general of the Japanese Army. So his round trip in America and European countries, including the Ottoman Empire, in 1886–7 had both duties of the diplomatic activities of the Royal Family and the intelligence activities of the lieutenant general.

Second, the Japanese Army developed the own human resources, like Genjiro AKASHI (1864–1919) and Yasumasa FUKUSHIMA (1852–1919). Later they became very famous in the Japanese society as the hero of the professional intelligence officers of the Japanese Army.

I would like to verify FUKUSHIMA's intelligence activities in Istanbul in 1896, depending on his *Diary in Asia and Europe* (36 volumes), the secret reports only presented to Emperor Mutsuhito, Prince Akihito, and some important persons of the politics and army.

FUKUSHIMA reported his daily of two weeks' stay in Istanbul and the detailed information about the Ottoman Army. He also analyzed the situation of the Ottoman Army and criticized very severely. It was very worth that this diary was the first case of the official report of the Japanese intelligence activities about the Ottoman Empire. It must effect the later policy of the Japanese Army toward the Ottoman Empire and the Mediterranean World.

In near future, I would like to make research about not only the part of the Ottoman Empire but also the parts of Egypt and Persia under the Qajar dynasty in this diary.